
魔法世界冒拳記

大政奉還

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界冒拳記

【Nコード】

N4672T

【作者名】

大政奉還

【あらすじ】

飛び交う魔法！

煌めく斬線！

そして走る拳打の嵐！

魔法が存在する異世界『ハルケギニア』を舞台に、ヒラガサイトの冒険が今、幕を開ける！

サイトは己の道を貫けるのか!?

準備運動（前書き）

もう一度、『ゼロ魔』に挑戦してみたいと思います。
更新は遅くなると思いますが、よろしくお願いします……！

準備運動

「なかなか楽しかったぞ、平賀の孫」

「じゅんじゅんふんふん」

鳩尾を貫通した拳。

激痛が体を駆け巡り、風船が萎んでいくように力が抜けていく。

流石は『拳聖』緒方一神斎……………一影九拳の一角だ。

ごめん、じいちゃん……………仇……………取れなかった。

膝を着き、うつ伏せに倒れる。

その時、何かが起こった。

眩いナニかが目の前に現れて……………

そこで、俺は意識を失った。

「貴女、誰ですか？」

「は？」

辺りは森。

俺は地面の上に寝そべっていた。

………いったいどうなったんだ？

小鳥の囀りや虫の鳴き声、風の音、眩い太陽の光が俺に生を感じさせてくれる。
死後の世界？

いや、違う。

現実だ。

っ！ 傷はッ！？

痛みは何故か感じないが、慌てて鳩尾を確かめた。

・・・傷はなかった。
その代わりに・・・

ムニユ

・・・？

鳩尾の上に手をやると、柔らかい2つの球体がくっついていていた。

って、はあああつ！？　なんだこれ！　え？　何でこんな・・・
おっぱいが、俺の胸にくっついてんだよ！？

焦る心を呑み込んで、寝そべる俺の顔を屈んで覗き込んでくる、金髪のやたらと耳が長い美少女に返事をし・・・

「お、俺は・・・って、え？」

ようとして、自分の声の高さに驚いた。

おかしい。

そう言えば、俺の髪ってこんなに長かったか？

腰ぐらいまで伸びてるんだが・・・あれ？

俺の体はいつたいていどうなってるんだ？

よ、よし、焦らず慌てず、全身のチェックだ。

― 損傷箇所 なし

― 筋力 ダウン

― 柔軟性 アップ

― 身長 160? 前後

― 性別・・・・・・女

!!!!!!?

傷がないのは疑問だが、まあいい。

けど、・・・・身長が縮んだ!?

俺は170? 台だった筈だ。

更に性別に関しては・・・・・・理解不能。

肉体スペックに関しては、男女の差こそあれ、男の時と同等なのが、

幸いと言ったら幸いだけど・・・

「あ、あの〜」

「・・・ああ、悪い。俺は平賀、・・・平賀才人だ。サイトでいいよ」

「あ、えと、わたしはティファニアです。テファでいいですよ」

ペコリと頭を下げるテファ。

絹のような金髪が輝き、まるで妖精のようだ。

立ち上がる。

服装は『拳聖』と死合った時のまま、上が柔術着で下が袴だった。

が、鳩尾に穴は空いてない。

そして、胸元を押し上げるおっぱい・・・

何がどうしてこうなったんだ？

夜。

虫や鳥の鳴く声が聞こえてくる。

俺はテファに連れられ、ログハウスのような木で出来た家にやって来ていた。

それはさておき・・・

「ごめんなさい。ごめんなさい。本当にごめんなさい」

俺は今、テファに頭を下げられている。

何でも、ここはアルビオン王国にある、ウエストウッド村と言う場所らしい。

で、地図を見せてもらったのだが、全く見覚えがない。

ヨーロッパっぽいかなーと思ったけど、アルビオン王国ってのが、空に浮かんでいると聞いた時点で、地球じゃないと判断した。

なんでこんな簡単に納得したって？

とどめとして、夜空に浮かぶ双子の月が、僅かな希望を打ち砕いて

くれたお陰だよ・・・

「もういいんだよ、テファ。 その・・・使い魔の召喚つてやつは、対象を選べないんだろ？ なら、テファに責任はないんだから」

「でも、でも、半分だけとは言っても、エルフの血が入ってるわたしが召喚したからかも知れないんだよ！？ なんでそんなに落ち着いていられるの？ ご家族だって心配してるかも知れないのに・・・」

この世界では人間以外の知的生物が居るらしく、その中でも、エルフは人間と敵対し続けているらしい。

ま、そんなのは関係ないがな。

「えーと・・・そこら辺はいいんだ。 両親は物心ついた頃にはもう居なかったし、育てくれた祖父も、数年前に・・・」

「あ、その・・・ごめんなさい」

ヤバイ、地雷を踏んだか？

家族の話になった辺りから、テファの周囲の空気が、ズーンと沈

nder。

……そう言えば、この村には大人が居なかった。

居たのは子供だけ。

まさか、テファの両親はもう……

「それじゃあ、わたしと同じだね……」

「……あー、なんだ、この話はここまでにしよう。それよりも、今後の事だ」

多少無理矢理だが、話を変える。

「しばらくの間、この村に置いてもらえないかな？」

「うん。大丈夫だよ。ずっといても良いよ。わたしの同年代の初めての友達だもん」

テファの言葉からわかる通り、俺の外見年齢は何故か十代後半ぐらいだ。

本当は23歳でしかも男だった訳だが……

「ありがとう。でも、少し世界を見て回ってみたいんだ。体に慣れたいからしばらくは動きを染み込ませないといけないし」

「・・・体に慣れたい？」

「ああ、こつちの話。ところで、この村には大人が居ないのか？」

「ええ。みんな孤児よ。あ、でも仕送りしてくれる姉さん・・・マチルダ姉さんならいるわ」

「ふーん、そつか。なに、自分の食い扶持ぐらい自分で用意するさ」

こうして、俺の激動の1日は幕を下ろしたのだった。

ラウンド1 始まりの村

「ふっふっ・・・はっ」

早朝。

東の空が明るみ始める前から目覚めた俺は、村から少し離れた空き地で鍛練に励んでいる。

この世界に召喚されて早1週間。 7日が過ぎた。

この間の修行で男の体と女の体は違うことを思い知らされた。

筋力、柔軟性、体重、重心、その他もろもろ。

ここは時間をかけて慣らしていくしかない。

やはり、女の身では筋力に難がある。

だが、瞬発力や柔軟性は男の時よりも向上している。

俺の家に伝わる『平賀流易筋法』と言う、独特の鍛練法によって、スピード重視に鍛えれば、更なる飛躍も夢ではないだろう。

・・・

さて、そろそろ朝食の時間か。

その前に川で汗を流しておこう。

・・・自分の体とはいえ、女体を凝視するのはどうも気恥ずかしいが・・・追々慣れていくしかないだろうなー

食事は村の中心に建つ、大きな（と言っても、周りと比べたら）家で村の子供達全員と食べる。

「あ、サイトお姉ちゃん、おはよー」

「はよー」

「おはよー」

「ジム、ジャック、サム、エマ、サマンサ、おはよう。みんな勢揃いだな。待たせちゃったか、テファ？」

「うっん、ちょうど呼びに行こうと思ったところよ」

全員でいただきますと手を合わせて、食事を始める。

今日のメニューはキノコのシチューとパン、そして、俺が森から採ってきたリンゴ？っぽい木の実だ。

正式名称は知らない。

「うん、旨いな。 テファは料理が上手いなー」

「ふふふ、ありがと。 でも、サイトだって川で魚とかをとってきてくれるじゃない。 素手で」

「はは、まあ、コツがあるんだよ」

ニコニコと微笑みながら食事を続けるテファ。

キラキラと輝いてすら見える。

胸も、規格外な程デカイし……

こんな光景を男が見たら、ただじゃおかないんだろうな

体が女になったせいか、俺は全然感じないけど……やっぱり、精神は肉体に引っ張られるんだな。

「なんか、楽しいことでもあったのか？」

「うん。ただ同年代の友達と、こうやって一緒に過ごすのって新鮮で」

「そうか。ま、楽しいならいいけどさ」

そんなこんなで、平穏な日常？を過ごしていた俺だった。

しかし、平穏はそう長くは続かないもの。

そいつらがやって来たのは俺がこの世界にやって来て3週間が過ぎたある日、テファと村の子供達、そして俺が庭にテーブルをだして、昼食を楽しんでいる時だった。

「この実、おいしー」

「ふふ、ありがとなエマ。結構木の高いところになってるから、なかなか見つけられないと思うぞ」

「ふーん」

太陽は真上。

この自然豊かな森に囲まれた場所は、なかなか空気が濃く、自然治癒力の向上に役立っている。

そして、小鳥の囀りには『拳聖』との激戦で高ぶっていた俺の心を静めて…………ちっ

「…………ちっ」

「？　どうかしたの、サイト？」

「サイトお姉ちゃん？」

「いや、なんでもないよサマンサ。　テファ、ちょっと」

「なに？」

テファに耳打ちして、家のなかに子供達を入れるように促す。

どうも、森から野蛮な気配を感じたからだ。

「サイト」

「俺は大丈夫だ。　さ、子供達を家へ」

コクリとうなずき、テファは子供達と家の中へ入っていった。

「そこの奴等、出てこい」

そう俺が言っと、シュカツ！と乾いた音を立てて、テーブルに1本の矢が刺さった。

そして、森の中から傭兵と思われる一団が現れた。

人数は15人。

ほとんど全員が弓矢や槍などで武装し、唯一の例外はローブを纏い、長い杖を持っていた。

「おいお前、村長はいるか？ いるなら呼んでこい」

杖を持っているのがリーダーのようだ。

そいつが俺に話しかけてくる。

「へへー、随分と別嬪じゃねえか。 こんな森の中に閉じ込めとくにはもったいねえや」

「まったくだ。 500、いや、うまくすりゃ1000エキユーで売れんじゃねえか？ 黒髪なんて珍しいしよ」

「…………お前達、何者だ？ 傭兵か？」

「『元』傭兵だよ。『レコン・キスタ』とアルビオン王国の戦争が終わっちまったからな。本業に戻るのさ」

「……………本業だと？」

「盗賊だよ」

と、1人が言うと、何がおかしいのか残りが笑った。

「まったく、勝って当たり前の戦争じゃ、報酬は低いからな。本業で稼がねえと飯も食えねえってわけだよ」

「抵抗するなよ。商品に傷はつきたくねえんだ」

そう言って近寄ってきた盗賊の1人が、俺の肩に手を掛けようとして……

「ぶぎゅえっ!？」

吹き飛んで木の幹に激突し、気絶した。

「ま、安心しろ。俺は活人拳だからな。殺しはしないよ。」

「なっ!？」×14

驚き、口が塞がらない盗賊達。

自分達より頭1つ、2つ分ぐらい背の低い、しかも女に仲間がやられたんだから、無理もないか……ま、これから全滅してもらうわけだな。

「ってわけで、お前らに少しでも俺の武術……平賀流について教えてやるっ」

「なに言ってやがる、このアマが！ 野郎共、かかれ!!!」

リーダーの掛け声と共に、盗賊達が囲むように迫ってくる。

「まず始めに、平賀流の正式名称は平賀流古武術だ」

「喰らえやがれ！」

四方向からの槍による突きをすり抜け、1人の背後をとる。

「だから、投げは勿論のこと、関節」

「ぐあああつ腕が、俺の腕が！！！！」

「突き」

「「ぶぐわっ」

「蹴り」

「ひでぶ！」

これで5人潰したな。

あとは10人。

「とまあ、柔術を基本に多彩な技があるわけだ」

「く、くそつ！ 弓だ！ 弓を使い！」

4人程の盗賊が一斉に矢を射る。

「喰らえ化け物！」

「そして、古武術でもあるため、特に弓などの遠距離武器には・・・

」
左手1本で飛んできた矢をすべて掴み、持ち主に豪速で返却。

――平賀流鏝返し

4人の利き腕側の二の腕に正確に突き刺さる。

悲鳴をあげて倒れる。

これで残り、6人。

両脇から降り下ろされてきた剣を横から捌き、2人同時に小手返しのように投げる。

地面にめり込んでいるが、死んではいないだろう。

あとの3人を面倒臭くなったから、鳩尾への突きで吹っ飛ばし、残りはリーダーが1人だけだ。

「あとはお前だけだな」

「ふん、小娘、格闘が多少強いからっていい気になるなよ。 二二」
までコケにされちゃあ、生かしちゃおけねえ」

杖を持ったリーダー。

魔法使いっぱいが、果たしてどんなモノなのか……

「イル・ウォータル・ニイド・イス」

はつきり言って、100回は殺せる程の隙なんだが、俺は盗賊の親玉が唱え終えるのをまつた。

これから先、魔法使いと戦うこともあるだろう。

その予習だ。

空気中の水蒸気が結晶化し、水となつてうねり始める。

その水は杖の先になる何本もの鞭のように具現化した。

あれが……魔法か。

「へへっ、この『水撃』のドリンが放つ、『ウィーター・ウィップ』を受けて、生き残れるかな」

ひゅんひゅんと唸りをあげて、水の鞭が高速で舞う。

「前書きはいいから、さっさと来いよ。せつかく唱え終えるのを待ってやっただから」

「っこの、アマが!!」

ドリンとか言う、盗賊のリーダーが、杖を振るった。それに連動するかのように、水の鞭が勢いよくしなり、俺を四方から襲ってきた。

が、まあ使い手のせいかわらんが、動きが単調。

避けるのは簡単だが……それじゃあつまらない。

「っほー……はっ!!」

十数本の水鞭に対して、俺は自身の手刀で迎え撃った。

鞭は抵抗を感じさせずに一瞬でバラバラに吹き飛んだ。

「なっ、バカな!? ……っ!!!」

「はい、掴んだ」

―― 平賀流地獄廻り

「ぎゃあああああああああっ!!!」

男の体がゴキッグキッ、と音を立てる。

すると、あゝら不思議。

両手足肘が曲がっちゃいけない反対方向を向いてしまいました――

泡を吹いて男は気絶した。

多分生きてるだろう………多分。

ま、村を襲おうとした罰だな。

コイツがリーダーだし。

「………こんなもんかな」

伏兵は……気配を探ったがいまいようだ。

「テファ、もう大丈夫だぞ」

そう家に向かって叫ぶと、扉が開いてテファが恐る恐る出てきた。

「サイト、大丈夫だった！？ ……きゃあ！」

おっと、間接が曲がっちゃいけない方向に曲がって気絶してる男なんて、ショッキングなこと以外の何者でもないな。

グキッ、ゴキッ、ゴキヤッと、間接をはめなおして………はい、元通り。

しばらくは激痛が走るだろうが、それも罰だ。

活人拳故、殺しはしないさ。

さて、コイツらをどうするか。

懲りずにまた来たら面倒だしな

「あ、ちょっと待っててね」

すると、テファが手に指揮棒のような杖を握って言った。

「？」

―― ナウシド・イサ・エイワーズ……………

ハガラズ・ユル・ベオグ……………

ニード・イス・アルジーズ……………

ベルカナ・マン・ラグー……………

長い。

さっきの魔法使いがやっていた詠唱の更に数倍。

そして、テファは杖を振り下ろした。

かげろうのように、空気がそよぐ。

一ヶ所に集めた15人の男達を包む空気が歪んで……………

「はい、大丈夫。これで、この人たちはこの村のことを忘れた筈よ」

「へえー、そんな魔法もあんのか」

「うん。わたししか使えないみたいだけど……」

このあと、流石に一気に15人は運べないから、5人ずつぐらいに分けて、森を抜けると出る街道に置きに行くことになったのだった。

ラウンド2 原因不明？

俺がこの世界にやって来てから、25日程が過ぎた。

もうすぐで1ヶ月。

あつという間だったが、お陰で大体はこの体の事がわかった・・・

「うえ〜」

・・・と思いたかった時期が俺にもありました・・・

朝、起きると体が少しだけダルかった。

「・・・・・・・・風邪・・・・・・・・か？」

・ 体は武術家の資本だから、体調管理には気を付けてるんだが・・・

いや、熱もないし、咳もでないから、風邪じゃないのか？

この土地特有の風土病か？

それならあり得る。

大事をとって、朝の鍛練は止めておこう。

朝食を食べに、テファの家へ向かう。

「」「」「」おはよー「」「」

「おはよう、サイト」

「うん、おはよう」

すると、すでにみんなが席についていた。

俺も席に座る。

「体調でも悪いの、サイト？　なんだが顔色が悪いよ」

「まあ、まあ大丈夫だ。　動けない程じゃないし、なんか体がダルいだけだから」

そして、食事を始めるのだが・・・

「・・・・・・・・は・・・・・・・・」

ダメだ。

もう太陽も昇って朝日が出てるってのに、いつこうにテンションが上がらない。

うゝん、なんなんだよ、この倦怠感は・・・・・・・・？

「ねえ、ホントに大丈夫なの？」

「テファ・・・・・・・・そうだ、この地域の風土病みたいのってあるか？」

「風土病？　うゝん・・・・・・・・わたし、小さい頃からここに住んでるけど、そう言うのには・・・・・・・・　わたしがハーフェルフだからかしら？　いえ、でも子供達がそんな病にかかったことはないわよ」

テファがあごに手を当て、むーん、と考えを巡らせてくれたが、どうやら風土病はないらしい。

だけど、この倦怠感の本物だ。

こわいな。

原因不明の体調不良か……

原因不明の体調不良は昼になっても続いた。

動けない程じゃないが、ダルいことにはわからない。

だが、日々鍛練を続けてきたんだ。

朝は止めておいたけど、昼はやるぞ！

そんな感じでいつもの広場にやって来たのだが……

「う……………」

今までの倦怠感が、背筋を何かが這い登ってくるような吐き氣に変わった。

……………おかしい。

ここまで体調が悪いのは初めてかもしれない。

と言うか、基本的に内功を鍛え上げると、内臓機能なども向上するため、あまり病氣にかからないのだ……………

片膝をつき、口元を抑えて下を向く。

「……………んあ？」

見慣れない……………いや、ある意味見慣れているものが、太ももを伝っていた。

ちなみに、俺の服装はテファのお古を縫い直して作った、上は黒の甚平、下は灰色のニーソだ。

そして、見慣れたもの……………赤い血液が、もう少しで、ニーソに染みてしまうところだった。

血つてのは服に付くと、なかなか落ちてくれないからな、気づけて良かった。

「・・・・・・・・？」

血を草で拭ってから思ったけど、俺ってケガとかしてたっけ？

太ももに傷は無いし・・・・・・・・出血箇所は更に上・・・・・・・・ってことは足の付けねだよな。

・・・・・・・・ここまで来て、俺はようやく『それ』に思い当たった。

そう、俺は今、肉体的に十代後半の女なのだ。

つまり・・・・・・・・

「・・・・・・・・は、ははは、は、は・・」

乾いた笑いしか出なかった。

ま、まあしょうがない。

ここは恥を忍んで女性歴の先輩、ティファニアさんに相談してみようかな。

ドアをノックする。

しばらくすると、テファは出てきた。

「はい、あ、サイト。　どうしたの？」

「テファ」

「？」

「生理の時って、どうすればいいんだ・・・？」

その後、テファに女性の体についてレクチャーしてもらい、この日は大事をとって部屋で静養することになった。

夜、だいぶ体調も良くなってきたから、夜風を浴びようと外に出ると、テファがいた。

外に出した椅子に座り、こちらに背を向け、ハープを弾いていた。

月明かりに照らされ、キラキラと輝く金髪。

エルフ特有の尖った耳も合わさって、彼女はまるで妖精のように見えた。

― 神の左手ガンダールヴ。 勇猛果敢な神の盾。 左に握った大剣と、左に握った長槍で、導きし我を守りきる。

― 神の右手がヴィンダールヴ。 心優しき神の笛。 あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空。

― 神の頭脳はミヨズニトニルン。 知恵のかたまり神の本。 あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に助言を呈す。

― そして最後にもう1人……。 記すことさえはばかれる……。

― 4人の僕を従えて、我はこの地にやってきた……。

「不思議な歌だな」

声をかける。

「サイト……ごめんなさい。起こしちゃった?」

「いんや、今日はほとんど寝てたから、逆に寝付けなくな」

「そっか。体は大丈夫?」

「ああ、お陰さまですっかり元気だ」

「……………」

無言。

でも、緊迫したような感じではない。

ただただ此処に居る。

空に輝く双子の月が俺たちを照らしてくれる。

テファが話し掛けてきた。

「サイト」

「・・・なんだ」

「氣を使わなくても、良いんだよ」

「え？」

月を見ていた俺は、テファの方を見たが、彼女はまだ月を見上げていた。

「行きたいんでしょ、旅に？」

「・・・ああ、その通りだ。」

でも、また何時この前来たように、盗賊がやって来るかわからない。

それが、心残り・・・

「一緒に暮らしてて、すぐに気付いたわ。貴女は渡り鳥みたいな人。・・・一ヶ所にずっとは留まってはられない人だって」

「・・・テファ、俺は・・・」

「大丈夫。私には記憶を奪う魔法があるわ。今までだってこれで何とかしてきたんだから」

そんなことを言うテファの瞳に、涙が光ったような気がした。

「……なに、確かに俺は渡り鳥みたいに一ヶ所には留まらない人間かも知れない。ま、根無し草ってやつだな」

「？」

「けど、旅に出ても、それが最期の別れってんじゃないんだ。テファは友達だし、子供たちもなついてくれてるしな」

「……そうだよな。一度離れたって、また会えるものね。それじゃあ、帰ってきたら、旅の話聞かせてね」

「ああ、テファが驚きすぎて、気絶しちゃうぐらいの土産話を持ってきてやるさ」

涙を拭うテファ。

森の中でただひとり、子供たちの世話をしながら生活してきたんだ。友達と呼べるような相手も居なかった筈だ。

子供たちが居るとは言え、孤独だった筈だ・・・

「指切りしよっぜ」

「指切り？」

右手の小指をテファに突き出す。

「小指と小指を絡めて、こう言うんだ」

――ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのーますゆびきった

「これで帰ってこれなかったら、俺は針を千本飲まないといけないんだ」

「えっ！ それじゃあ、サイトが死んじゃうよ!？」

「だから、絶対に帰ってこないとな」

ニシシ、と笑う俺につられるように、テファも笑った。

こんな口約束に強制力なんてないことは百も承知の筈だ。

それでも、テファは笑ってくれたんだ。

俺は必ずこの場所に戻って来ようと決心したのだった。

ラウンド3 旅立ち

早朝、太陽が昇る前のほかに白い夜明けのなか、一張羅の柔術着と袴に着替え終えた俺は、借りていた空き家の室内を見渡した。

ハンモックにテーブル、ちょっとした小物入れ……

この1ヶ月間、俺が過ごした場所だ。

「……………よし」

テーブルの上に用意しておいた、旅の道具を布袋に詰めていく。

ロープ、ランプ、皿を数枚、火打ち石、裁縫道具、包丁、金串、水筒、小さなやかん、それと甚平や下着、ニーソと言った着替えを数セット……こんなところかな。

肩にかけるように背負って、準備完了。

子供たちとテファとの別れは、昨日のうちに済ませている。
これから、未知の世界を旅するのだ。

なんだが、不安と期待が入り混じった複雑な気分だ。

村の入口から出て、最後に振り返る。

あの村は、俺のこの世界での故郷みたいなものだ。

やはり、どんな根無しにも、帰る場所はあるもんだ。

それが、飛び出してきた家とか、故郷とか、たとえ孤児であつても、思い出のつまった場所つてのがある筈だ。

両親は居らず、育ての親・・・師匠でもあつた大牙じいさんも・・・
そう言う意味ではこの村、場所は、短い間だったが俺の故郷とも言える。

と、そのとき、あわただしい足音が聞こえてきた。

この音と、気配からして、多分テファだな。

「はあ、はあ、待ってサイト」

「テファ」

予想通り、現れたのはテファだった。

手になにかを握っているが・・・？

「どうしたんだ？」

「これ、御守りがわりに持っていて」

そう言われて手渡されたのは、綺麗な石を数珠のように何個も紐に通して作られた、ネックレスだった。

「みんなで作ったの」

「……ありがとう」

思わず涙が出そうになった。

首に掛ける。

「いってきます」

さよなら、とは言わない。

必ず帰って来るんだからな。

「うん、気を付けて行ってらっしゃい」

霧が深く立ち込める森の中を俺は歩いていった。

森を抜け、街道に出た。

そして、まさにそのとき、太陽が昇りはじめ、俺が行く道を黄金に染め上げた。

・・・こんな光景を出発そうそう見られるとは、ラッキーだ。

眩しい朝日の中、俺は街道を歩き出した。

取り合えず、目指すはトリスティン王国だ。

後のことはそれから考えよう。

ラウンド3 旅立ち（後書き）

誤字などがありましたら、ご報告下さい。

ラウンド4 邂逅

さて、旅に出たはいいけど、何かしらの目的は欲しいところだ。

ウエストウッド村を出発してからまだ1日。

今は野宿するのにちょうど良さそうな場所を探している。

俺は眠っていても、敵意ある存在が近付いてきたら自然と目が覚める。

けど、安全策をとって木の枝で野営出来れば危険は更に減るだろう。

文化的に中世ヨーロッパ＋魔法ってかんじだから、盗賊なんて腐るほどいるだろうし、トロールやオーク、ゴブリン等々危険には事欠かない。

用心のしすぎってことは無いだろう。

お、あの木がいいかな。

ジャンプして枝に飛び乗る。

「うん、今日はここで夜を越すか」

布袋を枝に引つ搔けて、ランプと地図を取り出す。

シティオブサウスゴータって町と、港町のロサイスを結ぶ街道を港町の方向に歩いて来たから・・・そうだな、ロサイスまで歩きで1日2日ってところだろうな。

・・・今後の予定だが、どうするか？

ってか、地図に5つの国しか載ってないんだが、・・・

まあ、急ぎの用があるわけでもないんだ。

ゆっくり行くとしよう。

ふと、何かの気配を感じて目が覚めた。

敵意と言うわけではないが・・・？

辺りは薄暗く、僅かな月明かりのみが光源となっている。

「・・・・・・・・」街道から少し外れた森のなか、俺は注意深く気配を探った。

すると、・・・・・・・・見つけた。

俺が座る木から、約10メートル前方の草むらの中から、こつちを見る瞳が2つ。

常人なら、この薄暗さで見えなかっただろうが、生憎と俺は常人ではない。

いったい誰だろうか？

・・・・・・・・ま、確かめてみればいいか。

「ふっ」

呼気と同時に、枝の上から俺は動いた。

「なっ」

驚いたような声。

男性のものだ。

素早く背後に回ったつもりだったんだが、相手はなんと反応した。

右手で背後から頸動脈を押さえ、絞め落とそうとした俺に対し、相手は咄嗟に反応して振り返り、腰に差していたレイピアを突き出した。

疾い！

喉元目掛けて放たれた一閃を紙一重で回避。

「「！！！」」

俺の右手は相手の首を掴み、相手のレイピアは俺の首筋の横。

ピタリと動きが止まった。

次の動きに入れば、俺が相手のどちらかが死ぬか重傷を負うだろう。

「・・・・・・・・お前、ホントに人間か？」

そんな事を相手は尋ねてきた。

背丈は俺より頭1・5個分ほど高い。

金の髪に灰色の瞳。

線の細い体つき。

長く伸ばした髪をうしろで束ねている。

茶色い革のジャケットを羽織っているが、前が開いてるから、中の白いワイシャツが見える。

黒の革ズボンをはき、左の腰にレイピアの鞘を差していた。

そして、尖った耳……

「生憎と、俺は人間だ。　　そう言うお前は……エルフか？」

イケメンってのはこう言うのを言うんだと、教科書に載ってそうなほどの整った顔立ちだ。

「……そうだ。　　エルフを見て、怯えない人間は初めてだ」

敵意を感じないな。

「……そうか。　　すまん、俺の早とちりだった。　　盗賊かなにかかと勘違いしてた」

掴んでいた首から手を離す。

不思議そうな顔をしたエルフだったが、すぐさま俺に敵意がないことに気付いたようで、レイピアを鞘におさめた。

「眠っているところ、起こしてすまなかった。まさか、こんな場所人間が居るとは思わなかったんだ」

そう言つて、頭を下げてくるエルフの男。

なんだか、聞いていた噂とかなり違うな。

まあ、テファの印象が強いからだろうか・・・？

「いや、こっちが勝手に気配で目覚めたただだから気にすんなよ。

それに、先に手を出そうとしたのは俺だしさ。・・・ああ、俺の名前は平賀才人だ。ここで会ったのも何かの縁だし、取り合えず教えておく」

「ヒラガサイト・・・か。女なのに、随分と男のような口調で話すんだな。まあいい。ここで会ったのも『大いなる意思』の導きかも知れないな。私はイリユス。人間の世界に興味があつて、旅をしている。出会いに感謝を」

そう言つて、イリユスは踵を返した。

「ん、行くのか？」

「ああ、『大いなる意思』の導きならば、また何時か会うこともあるだろう。お前の名は覚えておく」

森の中へイリユスは入っていった。

「……不思議なこともあるもんだな」

人間と敵対している……らしい種族、エルフ。

彼らは遙か彼方、ガリア王国の最東端の更に向こう、サハラと呼ばれる砂漠地帯に住んでいると、テファから聞いていたが……

ま、どこの世界にも変わり者はいるもんだな。

翌日の昼、俺はとある農村を発見した。

彼処で今日は宿を借りるか。

獣よけの柵に囲まれた村だ。

棒切れで作られた門をくぐる。

「あ、ちょっといいか？ 旅の者なんだが、一晩泊めてもらえないだろうか」

ちょうど出くわした老婆に話しかける。

その老婆は頬が痩け、村もよく見れば……言っちゃ悪いが寂れていた。

「……なんだ、旅のお方ですか。こんな村で良かったらいくらでも泊まっていきなされ。どうせ空き家ばかりですから」

ため息混じりに、そう返された。

「あの………なにかあつたんですか？」

「……旅のお方には関係ありませんよ」

荒れ果てた村のようす。

何か強い力で叩き壊されたような破壊の跡。

修復しようとした跡も見受けられるが、途中で諦めたのか放置されている。

しかも、破壊は何度も繰り返されたようだ……

「俺、腕つぶしには自信があります。 教えてください」

「お嬢ちゃん……そうだね、話すだけならタダだからね」

再びため息を吐き、老婆は話し始めた。

「実はね……」

要約すると、村の近くにある洞窟に、オーク鬼と言う体長2〜3メートル程の人型のモンスターが住み着いてしまい、このサンゼルス村を襲うようになったそうだ。

「領主様に討伐の依頼は出したんだけど、戦争が終わったばかりでこんな村のことに構ってる暇はないって突っぱねられてね。 だから、最初は村の若者たちで討伐しようとしたんだ……だけど、返り討ち。 余計に村を襲うようになった。 村のみんなでお金を出しあつて、傭兵を雇おうとしたけど、大して豊かでもないこの

村じゃ、はした金しか用意出来やしない。それで・・・みんな、みんな出ていっちまったよ」

「・・・・・・・・婆さんはなんで出ていかなかったんだ？」

「どこに行けって言うんだい？ 村の外にツテなんてないし、こんな体じゃ満足に働けやしない・・・・・・・・残った村人は14人だけ・・・・・・・・奇跡が起こるのを祈るしかないさね」

「・・・・・・・・そうですか。 何処に洞窟があるか聞いてもいいですか？」

「そうだね、お嬢ちゃんは大変なから近づくんじゃないよ？ この村から南東に馬で1時間ぐらいの森の中さ」

「・・・・・・・・そうなんですか」

この日はこの村の空き家に泊めてもらったのだった。

ラウンド5 オークの住処

まだ朝陽も昇っていない早朝。

薄暗い森の中を俺は枝から枝へ飛び移り、駆け抜けていた。

「・・・・・・・・あそこか」

ぼつかりと口を開ける洞窟の入口、オークの住処だ。

「あれ、偶々こんな場所に来ちゃったな」

さて、一泊の恩を返そうかな・・・

さて、洞窟に着いたはいいが、どうやってオークを誘き出すか・・・

・

暗闇の中で囲まれたら、流石に俺でも危ないかも知れないしな。

「・・・・・・・・よし」

と言うわけで、消していた気配を解き放ち、洞窟に向かって盛大に
気当たりをした。

気当たりとは、まあプレッシャーをかけるようなもんかな。
一般人が達人級マスタークラスの気当たりを受けたら、意識を保てずに気絶するか、
恐慌状態になったりする。

本能が退化している人間でそれなのだ、本能まるだしの野生生物が
受けたら、反応せずにはいられないだろう。

「んぐいいいいいいいいいい！！！！」

ほらほら、出てきた。

数は・・・・・・・・20匹以上。

醜く太った体を獣から剥いだような皮に包み、突き出た鼻は豚のよ
うだ。

2メートルを超える巨躯・・・・・・・・2本足で立った巨大な豚ってか

んじの外見だな。

なるほど、これは村人の手には負えないだろう。

「お前ら、人の言葉はわかるか？」

活人の者として、モンスターだろうと人型の・・・いや、人型でなくとも意思疎通が出来るなら、共存の道を目指したい。

それに、人型の奴等を殺めるのは胸糞悪いからな。

俺が活人拳に属するのは、平賀流がそうなのもあるが、俺自身が人の可能性を信じたいからだ。

どんな悪人だろうと、改心する可能性はゼロじゃない。

だが、殺してしまえばその可能性はゼロになってしまう。

未来の可能性を潰しちゃうだろ？

あまい考えなのは分かってる。

けど、これが俺の道・・・例え死ぬことになろうとも、貫いてみせるさ。

・・・だが、意思疎通出来ず、その存在が人間の害悪にしかないなら、俺は・・・

「ぴぎいいいいいいいいいい！！！！」

俺の問いかけに対する返答は、樹木をそのまま持ってきたように太い棍棒によるフルスイングだった。

「・・・・・・・・ちっ」

半ばまで予想していたが、やはり人語を解さなかったか・・・・・・・・やむを得ない・・・・・・・・か。

「恨むなら、俺を恨め」

振り下ろされてきた棍棒を一步踏み込むことによって避け、腕を取って一本背負い。

頭から落とす。

棍棒を振り下ろす力＋自分の体重＋俺の投げる力

当然、オークの首が耐えられる訳はなく、ゴキッ、と嫌な音が響いてきた。

恐らく、自分が死んだことに気付く間も無く逝っただろう。

が、それを見た周囲のオークたちは更に興奮したのか、俺に襲い掛かってきた。

「へっ、来るか？」

棍棒や拳をオーク鬼たちは振ってくるが、大振りでしかも遅いため、回避するのは簡単だ。

「しっ」

すれ違い様に手刀を首筋に叩き入れる。

首の骨を砕く感触が手に伝わってきて、なんとも嫌な気分だ。

結局、数十秒で20匹以上いたオークたちは、地に伏せたのだった。

ランプに火を灯した俺は、洞窟の中に入っていく。

気配は感じないが、とりあえず確認のため、調べることにしたのだ。

「・・・・・・・・臭」

なんとも言えない、卵の腐った臭いを熟成させて、濃縮したような酷い臭いがする。

鼻をつまみながら、俺は奥へと進んでいく。

と言っても、複雑に入り組んでいるわけじゃない。

真っ直ぐで、オーク鬼が2匹ぐらい通れそうな道が20メートルほど続くと、広い空間に出た。

「・・・・・・・・」

生き物の気配はやっぱりしない。

オークの子供とかが居たら、後味悪くなるなーと思ってたけど、どうやらその心配はないようだ。

「さて、戻るか・・・・・・・・ん？」

今、ランプの灯りに反射して、奥で何かが光った気がする。
確かめるか。

「・・・・・・・・おお・・・・って臭!!!!」

思わずつまんでいた手を離してしまい、腐臭が俺の鼻をへし曲げる。
近付き見えてきたのは、金貨や銀貨が詰まった袋だった。

さっき光ったのは、その袋から溢れ出た金貨や銀貨だったようだ。

何処からかオークが奪ってきたのだろうか？

「・・・・・・・・ま、いつか」

こちらら無一文だ。

幾つかある袋のうち、小さな袋を手に取り、くつついた土を払って
から懐に入れた。

少し中身を見てみたが、金貨が百枚は入ってると思う。

それだけあれば十分だろう。

さてと、残りの大部分は、このオーク鬼の被害にあったあの村の入口にでも置いておくか。

十数年後、サンゼルス村はアルビオンで有数の大都市にまで発展することになるのだが、それはまた別の話・・・

ラウンド6 港町ロサイス

ウエストウッド村を出てから早3日。

俺が港町のロサイスに到着したのは、もう太陽が頭を引っ込めた黄昏時だった。

この世界に来て初めての都市だ。

街の明かりが、人の営みを感じさせてくれる。

大通りを進んでいくと、すぐに居酒屋と宿が密集する通りに差し掛かった。

辺りを見回す。

さて、何処に泊まるか……

と、ちょうどそばを中年の男が歩いて来たので、尋ねてみるか。

「すみません、ちょっと聞きたいんですが、この通りの宿で、良い宿をご存じでしたら、ぜひ紹介してください」

俺の柔術着と袴が珍しいのか、男は少し驚いたような顔をしたが、ある看板を指差してくれた。

「ありがとうございます」

なにになに……『渡り鳥の止まり宿』……か。

うん、なかなか良いネーミングセンスだ……俺的に。

ちなみに、なんで俺が字を読めるのかと言つとっ……まあ、勉強したからだ。

言葉は何故か翻訳魔法が掛かっているように……ま、そんな魔法があればだが……わかるのだが、文字は読めなかったのだ。

仕方なく、修行の合間に基本的なことぐらいは知っておかないと、と思って始めたのだが、スラスラと頭に入ってきて、そう苦労せずに習得できてしまった。

それはさておき……早速行ってみようかな。

扉を開け、中へ入る。

「いらっしやい！ 食事とベット、どっちだい？」

そんな威勢の良い声で、入った瞬間捲し立てられた。

俺と同じぐらいの年頃（外見年齢）、茶髪の女の子だ。

「あー、両方で」

そう答えると、食堂に連れていかれた。

食堂の中は薄暗いが、けっこうな広さがある。

天井にはランプがかけられ、その明かりに照らされた俺に、先客たちの視線が集まった。

珍しい格好をしているせいか、かなり注目を集めているように感じる。

いや、もしかして俺が女だからか・・・？

あの辺で酒を飲んでる野郎共から、絡み付くような視線をかんじるのだが・・・ウエツ、自分が男の時って、あんな感じで女性を見てたのか？

しかし、それもすぐにおさまり、先客たちは各々の会話にもどっていった。

ずいぶん賑やかな食堂だ。

俺は案内の女の子に押されるようにして、テーブルに案内された。

「とりあえず、飲み物を先に注文して！ 決まってるなら食べ物も注文してくれてもいいけど」

「あー」

どいつにするか。

メニューを見ると、かなりの数が書いてあった。

そうだな
・
・
・
・
・

「『スパークینگ・ワイン』と『螺旋のエレクトリックパスタ』つてやつで」

「はいよっ！　ちよつと待ってな」

目にとまった名前を言ってみた。

やっぱり、旅の醍醐味の1つは料理だろ。

しばらくすると、女の子がぶくぶく泡立つワイン？と綺麗な螺旋を描いたスパゲッティを運んできた。

[illegible]

飲んだ瞬間、口の中でスパークするワイン、そして、食べた瞬間

クリュー・ルーシー・ハン

間、螺旋仙人飛撃の直撃を受けたような衝撃を受ける、絶妙なるスパゲッティ……

気づけば皿が空になっていた。

旨い、テファの料理も旨かったが、ここの料理はそれを遥かに超えてきた……。間違いなく、この世界に来て、一番旨い料理だった。

ナイスだ、名も知れぬ中年の男よ！

食事が終わると、俺は部屋に案内された。

ベットが1つにソファアが1つ、テーブル、タンス……。狭いながらもなかなか良い部屋だった。

荷物一式を置いた俺は、金貨……。エキュー金貨か……。が入った袋を懐に入れ、一階のホールに降りていった。

あの『スパークキング・ワイン』の他にも、更なる出会いがあると期待したからだ。

ホールは広く、食堂と同じぐらいの広さがある。

降りてきた時間が遅かったらしく、席はほとんど空いていなかったが、ちょうど先客が空けた2人掛け、窓際の席を確保出来た。

俺は窓のそとに輝く月を見ながら、注文したすばらしいネーミングセンスの酒をちびちびと飲む。

ふと、目の前にある空いた椅子が目にとまった。

数日前に会った、イリユスと言うエルフをやはり旅に誘うべきだったか……

旅は楽しいんだが、1人というのは少し味気ない。

と言っても、エルフはハルケギニアで恐れられてるらしいから、一緒に旅するとなると、街とかに入れなくなっちゃうな……

チリン、と扉についたベルがなった。

客が入ってきたみたいだな。

入口に目をやると……そこにはイリユスが立っていた。後ろで束ねた長い金髪が、ランプの薄暗い明かりに反射して、鈍く輝いている。

イリユスはホールを見渡して、俺の所で顔を止めた。

目が大きく開かれる。

イリユスは俺の方に近づいてきた。

そこで気づいたが、イリユスの耳は人間と同じように、丸くなっていた。

彼は鞆をテーブルのわきにおろすと、俺の向かい側の椅子に腰かけた。

「驚いたな。　どうやら本当に『大いなる意思』の導きかもしれないな。　2日ぶりだな、ヒラガサイト」

「ああ、2日ぶりだなイリユス。　あと、サイトだけでいいぞ、ヒラガはファミリーネームだ」

「ほう、この辺りにはない言い回しだな」

そのとき、案内の女の子が近づいてきた。

「えーと、お兄さんはこっちの嬢ちゃんと一緒にかい？」

「……まったく、外見年齢は同じぐらいなのに、嬢ちゃんとは、威勢がよすぎるだろ。」

「ああ、知り合いだ。私もこの宿に泊まりたいんだが、部屋はあるか？」

「ええ、もちろん。今すぐあがりますか？」

「いや、少し話していくから、とりあえずビールを頼む」

女の子は頷いてさがっていった。

・・・それにしても、ちょうど俺が1人旅じゃ味気ないなと思ったところに来るとは・・・

「イリユスは次に何処行くんだ？ 人間世界に興味があって旅するとか言ってたけど」

「私か？ そうだな、とくに決めていないな。風の向くまま、気の向くまま、人間の営みを観察出来ればどこでも良いさ」

なんだか、俺と大して変わらないな。

「ふーん。ロサイスに来たってことは、次の目的地はトリスティンか？」

「そうなるな。もっとも、その後どうするか決めてないんだがな」

「それじゃあ、一緒に旅しないか？俺もぶらぶら世界を回りたいと思ってるんだが、1人旅じゃ味気ないと思ってさ」

イリユスは周りに聞こえないように、俺に顔を近づけた。

「私はエルフだが構わないのか？」

「大丈夫大丈夫、俺はそんなこと気にしないから」

「むゝ、この前も思ったが・・・サイト、お前はおかしな奴だな」

感心するように腕を組んで、そんなことを言ってきた。

「それは褒めてるのか？ 貶してるのか？」

「いやいや、感心しているんだ」

「で？」

「そつだな。約束もなく、こつやって再会したのだ、『大いなる意思』の導きだな。よし、お前の旅に同行しよう。よろしく頼むぞ、サイト」

「よし、その言葉を待ってたぜ、イリユス！」

ラウンド7 町中で

翌日の朝、日の出と同時に起きた俺は少し早い朝食をとり一階の食堂へ向かった。

服装は一張羅の柔術着と袴ではなく、紫色の甚平に黒いニーソックスだ。

ずいぶん早く降りてきたせいか、昨日の喧騒が嘘のように、食堂は静かだった。

案内をしてくれた、看板娘？の女の子がテーブルを拭いている。

「おはよう。随分朝が早いんだな」

「おはよ。そう言うあんたも早いわね？ なにか注文？」

女の子は俺を見ると、少し目を丸くして聞いてきた。

うーん、朝は軽めにしとくか。

「ああ、紅茶とパン、あとサラダを頼む」

「はいようっ！」

相変わらずの威勢の良い返事をして、女の子は厨房に向かっていった。

「ん？」

ふと、紙の束が置いてあることに気付いた。

どうやら無料で配っている新聞？のようだ。

1枚手にとって、席についた。

「ふーん」

なんでも、トリスティンの姫様とゲルマニアの皇帝が、近いうちに結婚するらしい。

「結婚式を見物に行くのか？」

と、背後から近寄ってきたイリュスが、そんなことを聞いてきた。

「・・・おはよう。誰が来たかと思ったら、イリユスか。ま、それも選択肢の1つではあるな」

「おはよう。王族同士の結婚式なんてそうあるものじゃないからな。かなり盛大にパレードとかが催されると思うぞ?」

「ふーん」

すると、女の子が料理を持ってきた。

「お兄さんは何か注文ある?」

「パンと牛乳を頼む」

女の子はすぐに料理を運んできた。

ま、簡単な注文だからな。

俺たちは食事をしながら話をすすめた。

「・・・そう言えば、イリユスの耳ってどうやって丸くしてるんだ?」

「これか？ 人間に見つかって、いちいち恐がられたり、襲われたりしたらたまらないからな。精霊魔法を利用して、形を変えていく」

「…………精霊、魔法？」

「ああ、人間は精霊魔法の事を先住魔法と言ったな」

「…………え？ 魔法は魔法じゃないのか？」

「…………ちょっと待て。魔法は知ってるよな？」

「当たり前だろ。魔法使いと戦ったことあるし」

「…………系統魔法と精霊魔法の違いは分かるか？」

「…………名前が違うな」

と、なぜかイリユスは思いつきため息を吐いた。

俺、変なこと言ったか？

「知らないなら教えてやろう。何故、人間の魔法をエルフである私が教えないといけないのか、甚だ疑問だが……まず、系統魔法と言うのはだな……」

結論、なんかイリュスって、真面目でいー奴だっということが分かった。人間が使うのが系統魔法、エルフや韻竜などが使うのが精霊魔法らしい。

系統魔法が『火』『水』『風』『土』の4系統あり、個人の意思の力で大なり小なりの『理』を変えることで効果を発揮させる魔法。

そして、精霊魔法が『理』に沿って、……つまり、自然の力を利用して効果を発揮する魔法らしい。

人の意思と自然の力、どっちが強いかって感じで、基本的に、系統魔法より精霊魔法のほうが強力らしい。

「へー、いろいろあるんだな」

「サイト、お前はそんなことも知らなかったのか？ 精霊魔法は仕方ないにしても、系統魔法は……」

「ま、今まで人里離れた場所で暮らしてたからな」

と、そんなことを話していたら、いつの間にか食べ終えてしまった。

「さて、この後はどうする？ トリスティンに行くと言ってたが、船を探すのか？」

「あーそうだな。俺、ちょっと服屋で柔術着と袴を作ってもらいに行こうと思ってたんだ」

「柔術着？・・・ああ、あの珍しい服か。今の服装もそうだが、かなり目立つぞ、あの格好」

「いいんだよ、俺の普段着兼、戦闘着なんだから。周りの目なんて気にしないさ」

うーむ、一緒に行動してもいいんだけど、それだと時間が無駄だしな

「そうだ、俺が服屋に行ってる間に、イリユスが船の予約を取ってきてくれよ。ずっと旅してきたんだったら、慣れたもんだろ？」

「まあ、別に構わないが・・・そうだな、昼にこの店で待ち

合わせてどうだ?」

「わかった、そんじゃ昼にな」

そうして、俺たちは一旦別行動をとることになった。

「そうですね、明日の、いや、明後日の朝までには完成させておきます。よろしいですか?」

「わかりました」

服屋で、柔術着と袴を作ってもらおうと思ったのだが、どうやらなんとなくかなりそうだ。

トリスティン行きの船に乗りたいたいから、それに間に合うようにって言ったら、船が出るのは2日後らしい。

なんでも、アルビオン大陸は空を漂っているため、毎日のように船が出航するわけではないらしい。

店主に見本として柔術着と袴を預け、俺は店を出た。

「昼までまだ時間があるな」

『渡り鳥の止まり宿』を出てから、まだ1時間ちょっと。

昼までまだ、2時間ほどある。

……よし、市場を見物しに行くか。

保存食とかがあったら買いだめしときたいし。

俺はぶらぶらと町並みを見ながら、市場を探した。

市場はすぐに見つかった。

戦後からあまり時間が経っていないせいか、品揃えは豊富とは言えなかったが、干し肉などを手に入れることが出来た。

「あれ、あんた・・・」

後ろから声をかけられ、振り向く。

すると、そこには『渡り鳥の止まり宿』の看板娘（仮）が立っていた。

「お、奇遇だな。 えーと……………」

そう言えば、この娘の名前を知らなかったな。

「あたしはアーニャよ。 あんたはなんて名前だっけ？」

「俺は才人だ」

「サイト、ねー。 昨日から思ってたけど、あんた、女なのに男みたいに喋るのね。 まったく、素材は良いんだからもっと着飾れば？」

「……………いいんだよそんなこと」

ほめられてるんだろうが……………元男の身としては、心に罅が入りそうだ。

艶々した黒髪が腰ほどまで伸びて、胸もテファって程じゃないけど、そうだな……………計ったことはないが、バストが80?ぐらいあるんじゃないか？

「あつそ」

「まあ、その話しは置いて、アーニヤは何しに来たんだ？」

「あたし？ 店の買い出しよ。 マスターに言われてねー。 そう言うあんたは？」

アーニヤは少しでも安く大きく、質が良さそうなものを目を皿のようにして探しながら言った。

「俺は待ち合わせまでの時間潰しだ。 と言っても、待ち合わせは『渡り鳥の止まり宿』だけだな。 あれなんて大きくて良いんじゃないか？」

見つけた大きめの野菜を教えてやる。

「ん？ ホントだ。 よく見つけたわね」

「はは、２？ 先の人の顔でも見分けられる自信があるぞ」

「ふーんへーそうなんだすごいわね」

信じてねえなこの娘。

ちなみにホントだぞ？

暗いと無理だが、明るければいける。

その時……

「きゃあああ」

「た、助けてくれー！！！」

「なんでこんなところにトロール鬼が！？」

そんな悲鳴にも似た叫び声が市場の外、町中の方から響いてきた。

「ちょ、ちょっと、何処に行く気よ！？」

「向こうの悲鳴が聞こえた場所に行く。アーニヤは逃げる」

そう言って、踵を返そうとすると、アーニヤが俺の肩を掴んできた。

「待ちなさいよ！ あんた、さっきの聞こえてきた言葉がホントなら、向こうにはトロールがいるのよ！ きつと、この前の戦争で『レコン・キスタ』の方に味方してた奴ね。 なんてか知らないけど、きつと軍が飼ってた奴が逃げ出してきたんだわ！」

軍が飼ってた……か。

なかなか無茶するじゃねえか。

「死ぬわよ、あんた！？ トロール鬼に丸腰で向かっていって、何が出来るとのよ！ 軍隊が何とかしてくれるまで、逃げるわよ！」

「何が出来るか、だって？ ……なんでも出来るさ……！」

「え？」

指一本で、アーニヤの体勢を制御する。

カクツ、と膝をつかせる。

「活人拳は人を守り生かす拳……今動かないで何時動くつてんだよ。 そう言うわけだ、アーニヤはさつさと避難しろよ」

そう言つて、俺は跳び上がった。

アーニヤには俺が消えたように見えただろう。

辺りを見回している。

屋根の上に飛び乗り、俺は悲鳴が聞こえてきた方向に向けて、風を切り裂き走り出した。

トロールはすぐに見つかった。

と言うか、屋根に跳び上がった時点ですで見つけていた。

デカイ。

オーク鬼のゆうに2倍以上。

体長5メートルはあるな。

手には何も握っていないが、その拳は直径1メートルにとどき、容易に凶器になりえるだろう。

「G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
! ! !」

拳の軌道上に人がいる！？

走ってきた勢いを殺さずに、俺はトロールの脇腹を狙って、跳び膝蹴りを繰り出した。

「ちえりゃ!!!」

「G
A
A
A
ッ
!
?」

体をを仰け反らせて、トロールは吹き飛び、道に倒れる。

・
・
・
・
・
やっ
たか？

ひいひいひつ

「あんた、早く逃げろ」

そう声をかけると、中年の男は何度も頷き、おたおたと足をもつれさせながら逃げていく。

と、背後で物音がした。

振り返ると、トロールがその巨体を起こして、立ち上がっているところだった。

「今のをまともに喰らって起き上がるか・・・タフだな」

血を口から吐き出しながらも、トロール鬼は立ち上がってきた。

あばら骨の4、5本は砕いた筈なんだけどな・・・

トロールは、そのまま俺に拳槌打ちのように拳を振り下ろしてくる。

「ふっ」

半身になって回避。

地面が砕けて、小さなクレーターができた。

こんなの受けたら、ペッチャンコになるな。

さて、こう巨体だと、投げも関節も無理っぽいなー・・・ってか、人外を相手にするなんて、想定されてないし。

『技十にして力はいらず』と謳われた櫛灘流柔術なら投げられるかも知れないが、あの流派はすでに途絶えてしまったらしい・・・と

にかく、投げは無理だ。

「……………なら、アレでいくか」

「G A A A A A ! ! ! !」

拳を振り下ろし、突きだして、俺の息の根を止めようと、トロールは雄叫びをあげて暴れまくる。

だが、巨体故に、その動作は遅い。

一般人相手なら十分だろうが、少なくとも、達人級をしとめるには役不足だ。

「こほ……………」

拳を振り下ろした隙をつき、俺はトロールの懐へ飛び込む。

そして……………

――平賀流鎧貫!!!!

トロールの胸目掛けて、必殺の掌打を叩き込んだ。

「G A A ■ ■ A A ■ ■ A ■ ■ A ! ?」

構えは解かず、俺は飛び退く。

トロールはピタリと動きを止めると、ズシンと音を響かせて後退した。

『よろこぶ鎧貫』はその名の通り、鎧すら貫く掌打だ。

外部からの打撃力もかなりのものだが、同時に叩き込む貫通力の高い勁によつて、身体の内部を破壊する。

これに耐えるには、かなり内功を鍛え上げなければならないだろう。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ッ! ! !」

ビクンと体を震わせたトロールは、口から滝のように鮮血を吐き出し倒れた。

「.....ふう」

いやいや、なかなかスリリングな暇潰しになっちゃったな

すると、アーニヤが駆け寄ってきた。

どうやら逃げずに見守っていたらしい。

「あ、あんた・・・大丈夫なの！？ いや、大丈夫よね。素手で
トロール鬼を倒すなんて、いったい何者よ？」

「はは、通りすがりの武術家さ。早く宿に戻ろう。ここに居たら、警備の奴等とかが来て、面倒なことになる」

周りにはトロールから逃げるためか、俺たち以外誰一人も見えないし、気配もない。

こうして、俺たちは『渡り鳥の止まり宿』へと向かったのだった。

イリユスの奴はもう来てるかな？

ラウンド8 練兵場

俺は屋根の上を人に見つからないように跳躍し、『渡り鳥の止まり宿』に向かっていた。

「ふーん、かなり筋肉がついてるし、無駄がない、引き締まった体ねー いったいこの腕のどこからトロールを倒すような力が出てくるのかしら？」

「あんな、単なる腕力だけで技を掛けつつて、たかが知れてるんだよ。 ようは身体全体を使ったり重心移動したりだな……」

「ふーん」

そんな風に話をしていると、背負ったアーニヤが背後から手を伸ばしてきて、俺の体をあちこち触り始めた。

「こ、こら、気が散るだろ！」

元男としてはかなり……その……なんだ、落ち着かないと言っか……

女になった身とはいえ、心は未だに男だと自負している。

背中に当たる、アーニヤの胸とか、二の腕とか、脇腹を這いまわる、アーニヤの両手とか……

ああ、アーニヤって着痩せするんだな……

だーっ、落ち着かねーつつっっ！！！

「で、こんなに余分な脂肪がついてないのに、なんで『ここ』だけ山盛りなのよ！ この！ この！！ この！！！！」

「ふあっ！？ ちょっと、おまっ」

甚平の上から、アーニヤの両手が俺の胸を鷲掴みに……

やべ、なんかゾクツと……

もみもみもみもみつと、揉み始めた！？

「むー、まったくとしていて、それでいてしつこくない柔らかさ……くっ、完全に負けたわ……止めるこのバカちゃんが！……っ、痛いわね！ 何すんのよ！」

ホールのテーブル席に腰掛け、紅茶を飲んでいる。

「来たか」

「ういっす。待たせちゃったか？」

「いや、まだ待ち合わせまで大分あるから、少しティータイムをな」

俺もテーブルについて、牛乳を注文した。

「さてと、船の事だが、出発は明後日の昼らしい。予約を取っておいたが、服は間に合いそうか？」

「ああ、服屋の店長に、トリスティン行きの船に間に合うようにって言ったら、明後日の朝に来てくれって言われたよ」

「そうか……。で、どうする？ 2日暇になってしまったな」

「うゝむ、そうだなー、どっかに楽しいことが転がってないもんかな」

「牛乳よ」

と、アーニヤが牛乳がなみなみと注がれたコップを持ってきた。

「ありがとう。　いやー、喉乾いてたんだよな」

ふー、朝に店を出てからずっと飲み物を飲んでなかったんだよ。

まがいなりにも、トロールと戦闘なんかしちゃったし・・・

ゴクゴクゴクっと。

「それにしてもサイト、あんたってそこのお兄さんと付き合ってるの？」

「ブハッ！！！！！？」

ッ！！！！！！！！！？

アーニヤの言葉に、思わず口に残っていた牛乳を吐き出してしまった。

「うおっ、汚いぞサイト」

テーブルから咄嗟に立ち上がって、イリユスは俺の牛乳を避ける。

「わ、悪い」

「ってか、なんだって？」

俺とイリユスが付き合ってるのかだって!?

た、確かにイリユスはカッコいいが……って、俺は何考えてんだよ!?

「あ、アーニヤ?　なんでそんな事を」

「え、いやまあ、乳を揉んだ仲だし」

なんじゃそりゃ!?

「って、そう言うことじゃなくて!」

「ち、乳を揉んだって……いや、そうじゃなくて、なんでコイツと俺が付き合ってるなんて思ったんだよ?」

「え？ い、いやゝ見るつもりはなかったんだけど、昨日の夜、ホルのテーブル席で顔近づけてキスしてたじゃん。いや、大胆だねー」

！？

き、期す、帰す、木須、鱈……キスしてただと！？

……ああ、もしかして、イリユスが自分はエルフだけど、大丈夫的な事を言ってきた時、顔を近づけてきてたな。

まさかそんな風に見えてたとは……

「いやいやいや、全然違うからな！？」

「ははは、冗談だよ冗談。ぶぶ、まったく、何時もはキリツとしてるのに、焦ってると可愛いもんね」

そんなことを言いながら、アーニヤは仕事に戻っていった。

と言っかなんだ、もしかして、俺ってからかわれたのか？

昼飯を食べ、やることもなかった俺たちは、中庭にある練兵場って場所で、鍛練することにした。

練兵場は、今ではただの物置き場になっていたが、それでも空いているスペースはかなりある。

鍛練するには十分だろう。

とりあえず、手刀1万回からいつてみようか。

「ふっ、ふっ、ふっ……」

と、そうやって鍛練していると、イリユスが視界の端に映った。

彼はレイピアを抜き、目にも止まらぬ速さで、突きを出していた。

その練度を考えるに、達人級に達していると言えるだろう。

森の中で初めて出会った時の、一瞬の邂逅で分かってはいたが、世界は違っても武術の達人はいるもんだなーと関心した。

「なあ」

「ん？　なんだ？」

「エルフって、みんなイリユスみたいに武術が達者なのか？」

そんな事を聞いてみると、イリユスは苦笑した。

「いや、普通は精霊魔法の補助程度・・・『一般人』の言う達人程度さ。私は少しばかり特殊だな」

「ふーん。　特殊って？」

「私はな、実は魔法が殆ど使えない」

「・・・は？　使えないって、お前、魔法で耳を変えてるんだろ？」

「ああ。　だから、殆どって言っただろ。　体の一部を変化させるのと、簡単な治癒魔法しか使えない」

「・・・・・・・・そうか」

「そうだ。精霊魔法を扱う才能が乏しい代わりに、私には剣術の才能があつたようなのでな。死に物狂いで特訓していたら、こんな風になっていた」

・・・・・・・・天才・・・・か。

師も居ずにこのレベルまで来るとは・・・

どのぐらいのレベルかと言うと、レイピアから放たれた剣圧で、触れてもいない石の壁に切り傷がつくレベルだ。

正直、戦ったら勝てるかわからん。

「どう思つて？」

「へ？ スゴいんじゃないか？ そのレベルまで登り詰めてるってことは、先の見えない無限の階段を休まず登り続けて来たってことだろ？ お前は『才能』の一言で片付けてたけど、実際、才能だけでそこまでになれるほど、武術は甘くないだろ」

「・・・・・・・・そうか。だが、魔法は上手く使えないぞ？」

「それはまた話が別だろ。魔法なんて、使えるやつはそんなに苦労しなくても使えちゃうんだからさ」

確か、精霊魔法はどうか知らんけど、系統魔法は『血』で使えるかどうかが決まるんだったよな。

「そうか……そんなことを言われたのは初めてだ。アディールに居た頃は……いや、何でもない。鍛練に戻ろう」

何故か嬉しそうにそう言って、イリユスは鍛練を再開したのだった。

……なんか良いことでもあったのか？

ラウンド9 夜鷹の事情

翌日。

船の出発が明日だから、今日1日、完全にロサイスで足止めだ。

手持ち無沙汰ってやつだ。

ホールで朝食を食べ終え、イリユスと俺はまったりしていた。

「はい、紅茶よ」

アーニヤが注文した紅茶を持ってきた。

さて、やることもないし、これを飲み終えたら、練兵場で鍛練でもしてくるかな。

と、そんなことを考えていたそのとき……

「ん？ なんの騒ぎだ？」

何やらホールが騒がしくなった。

「どうやら衛兵のようだな」

イリユスがティーカップを片手に言う。

衛兵って言うと、城とかを守ってるような奴等か？

なんでそんなのが宿なんかに大勢で押し掛けて来るんだ？

「……げ」

何故かアーニヤが苦虫を潰したような顔をした。

「……ん？」

なんか、俺たちの方を見てるような気がする。

「われわれは新政府の者だ。一緒に来てもらおうか……」

あれ？

もしかして、トロールを倒した件のことかな？

それ以外、考えつかないんだが・・・

小声でイリユスが俺に尋ねてくる。

「サイト、お前なにかしでかしたのか？」

「え？ い、いやゝさあな」

そして、新政府とやらの衛兵？は・・・

「『『『『『夜鷹』のアーニヤ！！』』』』」

・・・あれ？

何故かアーニヤを取り囲んだ。

「あー、ちょっとミスったかな」

そんなことをため息混じりにアーニヤは言って・・・む、胸元から指揮棒のような杖を取り出した。

そして、早口で何かを呟いたあと、杖を一閃させる。

ゴオッ、と風の槌が衛兵？達に襲い掛かる。

だが、衛兵？達はただの衛兵？ではなかったようで、アーニヤの魔法を予想していたらしく、火の玉や同じく風の槌を飛ばして、相殺した。

「……奴等、政府の者じゃないな」

「ん？　なんでだ？」

「服装をってみろ、『レコン・キスタ』の三色の旗印がついていない。それにもしアーニヤが罪人で、政府が捕えようとしているなら……」

「5人だけでくる訳がないってことか」

「そうだ」

そう。　何故か衛兵（偽）？は5人しかいないのだ。

確かにおかしい。

ちなみに俺たちはテーブルを蹴り倒してバリケードにし、紅茶を啜っている。

つと、流石に5対1じゃ分が悪いのか、アーニヤが押され始めた。

「・・・なあ、これは助太刀した方が良いよな」

「・・・・・・はあ、そう目を輝かせて言うな。幼子が、甘いお菓子を目の前にしたような目だぞ」

そんなに輝いてるか？

「だつてほら、厄介ごとだぞ？ 旅の醍醐味の1つだろ？」

「それはお前だけだ！・・・・・・まあいい、知らないなかでもないんだ。アーニヤを抱えて2階に上がり、荷物を持って逃げるぞ」

「オッケー！」

別に此处で片付けちゃってもいいんだが・・・・いいノリだイリュス。

流石は俺が見込んだ男だ！！！！

つと、ヤベ、アーニヤが捕まりそうだ。

「ちょっと待ったーっ」

とりあえず、注意を引くためにテーブルの上に立って叫んでみた。

衛兵（偽）の男達は、アイツ何やってんだ的な視線を一瞬こっちに向けた。

だが、その一瞬で十分。

イリユスが隙をつき、アーニヤを脇に抱えて2階への階段を爆走している。

俺も遅れずに並走。

2階に上がりきった辺りで、男達も動き出したが、もう遅い。

自分の部屋に置いてある、荷物の袋を肩に担いで、俺は窓から外に飛び出した。

「……………で？」

「で？ってなにがよ」

アーニヤを連れて『渡り鳥の止まり宿』を飛び出した俺たちは、適当な安宿に部屋をとり、ほとぼりが冷めるのを待っている。

「だから、あいつらは何者なんだよ？ イリユスによると、本物の衛兵じゃないみたいだけど？」

「さ、さあね。あたしも知らないわよ」

俺の言葉に目を泳がせるアーニヤ。

めちやくちや怪しいな。

じいーと見ていると、口笛を吹きながらじりじりと後退り始めた。

「『夜鷹』・・・か」

「っ！」

なにやら考え込んでいたイリユスがそう呟くと、アーニヤの動きが

ピタッ、と止まった。

「お、イリユスはなんか知ってんのか？」

「いや、詳しくは知らないが、有名な大怪盗にそんな名前の奴が居たな。最近『土くれ』のフーケと言うのが有名だが、一昔前までは、怪盗と言えば『夜鷹』だと言われるほどだったぞ。義賊として知られ、弱きを助け強きを挫く。ああ、10年前には子供達の間で『夜鷹』ごっこ、なんて遊びが流行っていたな」

「ほー」

か、か、怪盗だと!?

大怪盗ってあれか、ル?ン三世的なやつか!?

流石は魔法世界。

流石はハルケギニア。

リアル?パンが存在するとは……

イリユスの話を聞くと、アーニヤはため息をついて、部屋に1つしかないベットに腰掛けた。

「・・・はあ、わかったわ。 話せば良いんでしょ。 あいつらに顔を見られた以上、あんた達も無関係とは言えないしね」

シリアスか？

もしかして、シリアスなのか？

たまたま泊まった宿で何かの陰謀に巻き込まれる・・・まさに・・・

「・・・旅の醍醐味」

「は？」

「いや、気にせず続けてくれ。 まだまだ付き合いは短いが、サイトは少しばかり常識が足りていないからな」

「いや、お兄さ・・・いや、イリユスで良いわよね？ あんたも似たようなもんよ？ ・・・目が輝いてるし」

「なっ・・・！！？」

ふん、ざまあみろ。

いや、まあ達人級の武人に常識を求めちゃいけないと思うけどね。

マスタークラス

それでも俺はだいぶまともだろ？

ワカゲノイタリで500人の達人を半殺しにしたって超人もいたらしいし……

と、気をとりなおして、アーニヤが口を開いた。

「イリユスが言った通り、あたしは『夜鷹』よ。……3代目のね」

「3代目……」

「おじいちゃん、お父さん、そんであたし。まだ『レコン・キスタ』とアルビオン王国が戦争中だったわ。馴染みの仲介屋から『始祖の祈禱書』ってのをトリステインから盗んでこいって依頼がきたのよ。お父さんは断ったんだけど、そしたらいきなり人が変わったみたいに襲い掛かってきて……それからよ、あいつら……・暗殺ギルドの奴等があたしを狙ってくるようになったの。生死を問わず、あたしを捕まえようとしてくるのよ」

困ったもんだわー、と乾いた笑い声をアーニヤが溢す。

「暗殺ギルドに依頼している相手は分かっているのか？」

「調べてはいたんだけど……見つかっちゃったしもう無理ね。シティオブサウスゴータにあたしが隠れてるって噂を流しておいたから、しばらくは大丈夫かと思ってたんだけど……なめてたわ」

なかなか波瀾万丈な人生を送っているようだ。

……言葉を濁したが、アーニヤの父はもう……そのことが、少しかだけ俺の過去……唯一の肉親であり師匠だった大牙じいさんを『拳聖』に惨殺された過去に似ている。

最初の1年は荒れてたもんだ。

あやうく修羅道に堕ちる一歩手前まで行ってたと思う。

なんとか踏みとどまって、師匠の遺志を継ぎ、活人拳を貫き通し……まあ、結果的に『拳聖』緒方一神斎に完敗したわけだが……アーニヤはどうだろうか？

所詮、俺は赤の他人。

肉親の仇を討ちたいと言うなら、止める権利はない。

「なあ」

「なによ?。」

「アーニヤは父親の仇を討ちたいか?。」

「……っ!。」

「サイト」

イリユスが俺に『ストレートに聞きすぎだバカ』的な視線を向けてきたが、俺の真剣な表情に気づいたらしく、口を閉ざした。

「……『夜鷹』は女、子供には手を出さない。でも、野郎は別よ。父さんを貶めた奴が、仮に男だしたら……そうね、産まれてきたことを後悔させてやるわ。具体的には自分のナニが捻りきれていく感覚を味わわせてやる。女だったら……ちよこつと半殺しね。殺しちゃったら、お父さんに『夜鷹の誇りを汚すな!』って、怒られちゃうだろうしね」

真顔でそんなことを言ってきたアーニヤ。

背筋にゾクツと寒気がきて、思わず股の間を手でおさえちゃった。

あ、俺は今、女だった。

イリユスを見ると、少しだけ青ざめた顔をしている気がする。

「……ま、まあそれは置いてといて。

「イリユス」

「私は別にかまわないぞ」

どうやら俺の考えはイリユスにお見通しだったらしい。

「アーニヤ、俺たちの仲間にならないか？」

直球で言ってみた。

ま、そんなすぐに返事が返ってくるわけな……

「良いわよ。　　と言うかその言葉を待ってたわ！」

「……………はい？」

ついさっきまで、シリアスな雰囲気醸し出していたアーニヤが、一瞬でイイエガオに早変わりし、即答してきた。

そのあまりの変わりように、気の抜けた返事をしてしまった。

「な、な、なな・・・」

「いやー、奴等に見つかっちゃうし、これからどうしようかと思つてたのよ。こんな可愛い女の子がいるパーティーに入れるなんて、ラッキーだわ」

「・・・流石は大怪盗の3代目。 迫真の演技だったな」

つて、ええ!?

今のつて演技だったのか!?

「ちよつ、お前・・・」

「勘違いしないでよ!? お父さんとか、暗殺ギルドの話は本当なんだから。 夜鷹家訓その3『常に飄々と、余裕であるべし!』つてね」

「・・・なんだか、随分と濃いパーティーだな。」

女体化して若返った異世界の達人級武術家、ヒラガサイト。

魔法がほとんど使えない、エルフの達人剣術家兼旅人、イリユス。

そして、大怪盗『夜鷹』の3代目、アーニヤ。

……あれ？

アーニヤが一番まともに見えてきたぞ？

「ま、これからよろしくねε〃ε〃」(ノ)(ノ)「

ピロリロリンっ

『サイトと愉快的な仲間達に、『夜鷹』のアーニヤが加わった』

ラウンド10 暗殺ギルド

翌朝。

柔道着と袴を取りに行き、準備を終えた俺たち3人はトリステインへさっさと出発しようと思ったのだが・・・

「ったく、今日はよくナイフが飛んでくる日だな」

アーニヤの心臓目掛けて飛んできた投げナイフを『鏝返し』で投げ返す。

屋根の上で、また1人暗殺者が行動不能になった。

ちなみに、安宿を出て港に行く十数分の道のりをまだ半分程度しか進んでいないのに、今ので4人目だ。

暗殺ギルドに依頼した相手は何を考えてるんだろうな？

アーニヤに何かを盗ませたいなら、殺したらもう終わりだろうに。

フェニックスのなんたらかんたら的な、死者蘇生アイテムでもあるのだろうか？

「あんだ、トロールを素手で倒したぐらいだから、強いのはわかってたけど、やっぱり間近で見ると、スッゴいね」

楽しみにそう言う。

そんなアーニヤの格好は、ウェイトレス姿ではもちろんなく、黒いハードレザーを着て、その上に旅人がよく使う、灰色のマントを羽織っている。

「ま、本来は飛んできた矢を掴んで投げ返す技だからな。 投げナイフぐらいなら応用出来るさ」

「ちょっと待て。 軽く流してるが、トロールを倒したって、何の話だ？」

「あれ、イリユスは知らないの？ サイトが倒したやつよ」

「……聞いてないが？」

そう言えば、そんなこともあったな。

「あれだ、暇潰しだよ」

「・・・・・・・・そうか」

やれやれって感じで首を振るイリユス。

と、また物陰からナイフが飛んできた。

それを一瞬で抜刀したイリユスのレイピアが、8等分に切り裂いた。と言うか、俺とイリユスの制空圏・・・・つまり間合いの結界の中にアーニヤは入ってるんだから、遠距離からの攻撃が通るわけないだろ。

それを見ていたアーニヤが、今度は驚いたようにイリユスを見た。

「す、スゴいわね。　ちょっと自分の常識を疑いにくくなってきたわ」

ま、普通なら高速で飛んできたナイフを投げ返したり、8等分に斬ったり出来ないだろうしな。

港まであと少し。

いい加減諦めてくれないかね

「・・・・・・・・なあ、1人取っ捕まえれば、依頼相手がわかるんじゃないか？」

港が見えてきた。

それにつれて、飛んでくるナイフの数が多くなっていた。

制空圏は死角からの攻撃にも対応出来るから、捌くことは簡単なんだが、いい加減面倒だ。

そう思ってたみてけど、アーニヤが首を横に振る。

「無駄よ。 あいつらは奥歯に毒を仕込んでて、捕まったら自害するって掟があんのよ」

「……なるほど、クライアントの情報は死んでも護ると言うわけか」

「ホントか？ それじゃあ、ヘタに捕まえるわけにもいかないか……」

と、そうこう言ってる間に、港に到着。

おお、本当に船が宙に浮いてる！？

大陸がまるごと空に浮いてるぐらいだから、今更なんだけど、それでも間近で見ると驚きだ。

何隻もの船が、太いロープで繋がれ、フワフワと浮いているのだ。

「・・・おお」

つつい口から声がもれてしまった。

うん、この景色を俺の心の中の『ハルケギニア ベストスポット』の002として登録しておこう。

ちなみに001はウエストウッド村だ！

「ん、ナイフが止んだ？ いい加減、諦めてくれたか？」

イリユスが言った。

確かにナイフが止んでるけど、あそこまでしつこく狙ってきた奴等が、そう簡単に諦めるもんなのかな・・・？

アーニヤも腑に落ちないようで、首をかしげている。

「ん、あいつらがそんな簡単に諦めるわけないんだけどな。あんならが予想以上に強いから、引き下がったってことも無くはないと思うけど・・・。まさか、あたし達が乗る船に、何か罠があるのかも・・・。」

む、どうも気になるな。

……ま、いつか。

「……ふむ、まあ問題ないだろう。罨は何時どこにあるかわからないから怖いのであって、あることがわかっていれば、なんてことないしな」

「イリユス、あんた何言ってるのよ！ あたしの勘が120%罨があるって告げてるわよ！？ って、サイトもなに頷いてんのよ！？ なんか作戦でもあるの？」

「んー、あるにはあるよな、イリユス」

「ああ。勿論あるとも。昨日、宿で顔を見られた時点で、私はしっかり考えておいたぞ」

キヨドルアーニヤに、俺とイリユスは声を合わせて言った。

「「なりゆきまかせ大作戦」」

うむ、打ち合わせなしでハモるとはイリユスと俺の相性は抜群だな。

・・・いや、相性ってなんのдар？

自分で思ってたんだが、意味がわからん。

と、そんな完璧な作戦を教えてあげたにも関わらず、アーニヤは膝と手を地面について、落ち込み始めた。

「な、なりゆきまかせて・・・ ああ、父さん、あたし今からそっちに行くことになるかも知れない・・・ は、は。ダメだ、コイツらぜんぜんダメだ。 あたしがしっかりしないと・・・」

「さ、早く船に乗るとしよう」

ん？

今更なんだけど、アーニヤって船に乗れるのか？

イリユスが予約したって言うても、それは2人分だろうし。

「なあ、アーニヤって船に乗れるのか？」

「大丈夫だ。 こんなこともあるかと・・・ は考えてなかったが、個室をとってある。 2〜4人用だ」

船に乗船する人々はそれなりの人数がいて、列を作っている。

俺たちはその列に並びながら、会話して時間を潰していた。

「レイピアの前身はエストックという両手突き剣だ。これは甲冑を着た相手のチェインメイルを刺し抜くもので、構造も扱い方もレイピアとは異なる。戦場でよく使われるブロードソードやサーベルとは違い、レイピアは街中の護身用として用いられるが、だからといって、けして弱いわけではないぞ。私は自分で言うのもなんだが、突きにかんしてはかなりのレベルだと自負している。だがそれだけじゃない。レイピアの刃は鋭く両刃だ。故に、裏刃のテクニクなどもあるぞ」

「ふーん、奥が深いんだな」

イリユスがながながとレイピアについて語る。

自分の技量に合う剣がなかなかなくて、気を付けないとすぐに刀身

が折れてしまうそうだ。

「・・・ふ・・・ふふ・・・」

ん？　なんかアーニヤが震えてるな。

そんなに笑える話じゃなかった筈だけど・・・

「あんたの目には、あたしが笑って見えんの！？　ねえ！？」

周りの注目を集めなかったためか、静かに怒鳴るという器用なことをしながら、俺のえりを掴んで揺すってきた。

ガクガクガク、と頭がシェイクされる。

むー、仲間だから投げ飛ばすわけにもいかないな。

「こら、やめろって・・・頭を揺らすな！」

まあ、そんな感じで時間を潰して、列が進むのを待っていた。

すると、列の横を荷馬車が通りかかってきた。

船に積む荷物だろうか？

それにしても1台しかないのはなんでだろう？

そんなことを考えていると、馬車が俺たちの脇で停まり、荷台にかけられていたシートが内側から捲れ上がった。

「イリュース！」

「ああ」

「やつぱり罠！？」

荷馬車までの距離はだいたい15メートル程。

出てきたのは9人。

黒いボロを纏い、のっぺらぼうのような白い仮面をつけた奴等だ。

周りの客が注目を集める前に、奴等は両手に鈍い輝きを放つ厚手のナイフを握り、一斉に気当たりをしてきた。

ピリピリと感じるプレッシャー。

そうだな、気当たりから考えるに、奴等の実力は妙手の半ばって感じかな？

ちなみに妙手と言うのは武術の段階の1つだ。

弟子、妙手、達人・・・

そのなかで、もっとも長く不安定なのが、妙手だ。

具体的にはそうだな・・・プロの格闘選手の中で一流と呼ばれる者で、弟子と妙手の間ぐらいだ。

奴等はかなり出来るってことだ。

・・・だけど、なんであいつらは気当たりなんてしてきたんだ？
暗殺するなら気配は逆に消してくるだろうに。

そんなことを一瞬思った俺だったが、その理由はすぐにわかった。

「きゃあああああつ!？」×この辺りの一般客

「くっ、そうか!」

達人級の俺やイリユス、それに荒事にはそれなりに馴れているだろうアーニヤは大丈夫でも、その周りにいる一般人は違う。

気当たりにあてられ、恐慌状態に陥っている。

列が乱れる。

バラバラの方向に逃げ惑う客たち。

そんな人混みに紛れて、風のようにスルスルと黒いボロ達が俺たちに・・・いや、アーニヤに迫ってくる。

「ちっ」

思わず舌打ち。

大抵の罠なら切り抜ける自信があつたが、アーニヤを守れなきゃ意味がない。

人混みで制限される動き。

奴等には悪いが、少し痛い思いをしてもらうしかないな。

イリユスとの一瞬のアイコンタクト。

頷きあつて、俺たちは同時に動き出した。

1人目。

人混みの中に見つけた、一本道を1歩目からトップスピードに入って接近。

「ぐあっ!？」

すれ違い様に鳩尾に一撃入れ、意識を断つ。

2人目。

同じくすれ違い様に一撃。

3人目。

斬りかかってきた腕を取り、重心の下に入って右腕一本で持ち上げる。

4人目。

同じく2本のナイフで俺の首筋を斬りつけようとしてきた奴に、持ち上げていたのをぶつけ、背中合わせになるように地面に叩きつけ、ついでに肘関節を外し、動けないように組み合わせてから、投げる。

これで4人無力化したわけだが、そこまで。

残りの奴等には脇をすり抜けられた。

さすがに人混みのなか、周りを気にしながらだと無理があるな。

だが、後ろには頼れるレイピア使い、イリユスがいる。

しかし……

「くっ」

正確無比な高速の突きも、こう人が多いと、巻き込んでしまう。

結局、イリユスが止められたのは俺と同じく4人だけだった。

ヤバイ……かな？

首筋を切り裂こうと、鈍く輝く2本のナイフがアーニヤに迫り……

「舐めんじゃないわよ！！！」

風の刃？を纏わせた杖に止められた。

だが、相手は妙手だ。

一瞬で崩されて、致命的な一撃をもらうだろう。

間に合うか？

焦っていたら、以外にもアーニヤは頬や二の腕を浅く斬られながらも、持ちこたえた。

あと2秒、いや、1秒でもあれば、黒ボロはアーニヤを仕留められただろうが……時間切れだ。

「俺が居るのに、余所見はいけないな」

アーニヤの首筋を裂こうとしていたナイフを持つ手を背後から掴んで止める。

「ッ!？」

肘の関節を決めながら、一本背負いのように地面へ叩きつけ、同時に関節を壊す。

「あ、ありがと、助かったわ」

「いや、悪かったな。まさか一般人を妨害に使ってくるとは思わなかった」

「……これで終わりか？」

「ふう、まったく冷や汗ものだったな」

「イリユス、殺してないよな」

「ああ、無益な殺生はしない質だな。殺さずにすむなら、その方がいい」

鞘にレイピアを納めながら、イリユスは言った。

さてと、一件落着かな？

すると・・・

「うあああん、ママどこ」

7、8歳の男の子が、両手で目を擦って歩いてきた。

きつと、さっきの騒動で母親とはぐれちゃったんだな。

そんな男の子にアーニヤが近づく。

「大丈夫、ぼく？ お姉ちゃんが一緒にお母さんを探してあげるからね」

優しい声で泣き止ませようとする。

屈んで目線を合わせ、頭を撫でようとした。

「う、うん・・・」

涙を拭って両手を下ろし、男の子がアーニヤと目を合わせる。

瞬間、俺の第六感が微かな違和感を感じた。

第六感・・・つまり勘だが、だからと言ってバカにはできない。

達人級の武術家は、第六感を武術へ取り込むことで、目で追いきれない動きを察知する。

磨き抜かれた勘は『六徳』から『虚空』そして『清浄』へと、より鋭敏に進化していくのだ。

それが感じるこれは・・・殺気か!?

「ほら、泣かないの。男の子でしょつつつつ!？」

気付けば、わりと手加減少な目で俺はアーニヤを蹴り飛ばしていた。

「痛つつつたああああ!？なにすんのよサイト!？」

「ごめんごめん、でもよく見てみろよ。お前、死ぬところだったぞ?。」

「へ・・・・・・・・！？」

見れば、アーニヤの首筋があつた辺りにナイフが突き出されていた。勿論、握っているのはついさっきまで泣いていた男の子だ。

ちっ、と舌打ちして、男の子はナイフを構えたまま飛び退く。

「う、うそ！ あんな小さい子供まで！？」

「助かったぞ、サイト。今は気付けなかった」

イリユスが柄に手をかけ、いつでも抜刀できる体勢で言ってきた。

「いや、気にすんな。俺の方が近かつたし、自分以外に向けられた殺気を感じとるのは至難だしな」

そう言つて、男の子の方に向き直る。

ナイフを隙なく構え、表情を消した姿。

ついさっきまで泣いていたのが嘘のようだ。

いや、実際に嘘だったんだろうが、とんでもなくリアルな迫真の演

技だった。

「…………ボクは殺気を消していた筈だ。　どうして気づいた？」

「どんなに殺気を消そうが、攻撃の瞬間はどうやっても消しきれないもんだ。　喻え、自分が狙われてないとしても、俺くらいになるとその僅かに零れた殺気だけで反応することが出来るのさ。　…イリュース、アーニヤ。　こいつは俺がやるから、周囲を警戒してくれ」

「…………オツケー」

「了解した」

「…………こいつ、こんな若さで達人の域に片足突っ込んでやがる。

ハッキリ言って異常だ。

神童どころじゃない、鬼才……いや、天災（誤字じゃないぞ）だな。

「しっ」

と、袖から4本の投げナイフを取り出した男の子が、ほとんど溜め無しで投擲してきた。

同時に、俺にも聞き取れないような早口で、何かをボソボソと呟き始める。

ナイフは避けるとアーニヤを襲う軌道だ。

「ちいつ!？」

――平賀流鏝返し！

片手の指の間に2本ずつナイフを挟んで止め、そのまま投げ返そうとした。

が、男の子は手に持つナイフを俺に向けている。

その周囲には、十数もの鋭利に尖った氷の矢!？

――ウインディ・アイシクル！

瞬間、俺目掛けて殺到してきた1本1本が20センチはある、氷の結晶。

その流星群と共に、男の子もナイフを構え、突っ込んでくる。

あのナイフが杖代わりか！？

まさかそんなことも出来たとは……

制空圏を意識して、間合いに入ってきた氷の矢を正面からではなく、側面から円運動に巻き込むように捌いていく。

「ブレイド」

そんな呟きが聞こえてきた。

見ると、ナイフに青白い光が纏わりつき、その短い刀身が長剣並みに伸びている！？

「うおっ！？」

霞む腕。

青白い斬線を残し、ナイフが奔る。

右下からの斬り上げを屈むように紙一重で回避するも、髪の毛が数本、宙を舞う。

どうやら、あの魔法の刀身には重さがほとんど無いようだ。

ナイフを振る速度に衰えない。

続けざまに二閃、三閃と空間に刻まれる斬線。

だが、最初の一撃で間合いを把握した俺は、体捌きのみで回避していく。

「ハッ！」

顔面への突きを間合いを読んで後退して回避した、その時！

「うつ！？」

なんと、青白い刀身がさらに伸びてきた。

咄嗟に首を傾げながら、刀身の側面を叩くが、浅く頬を切っ先部分で斬られた。

ピリピリと感じる僅かな痛み。

「…………やりづらいな。」

変幻自在の間合い……………いつたい何処まで伸ばせるんだ？

だが、魔法で出来た刀身は半物質化しているようで、触れられることがわかった。

白刃取りのように、側面を挟み込んで固定。

握っている柄を蹴りあげること、杖を取り上げることを狙う。

魔法使いは杖がなければ能力のほとんどが封じられる筈だ。

しかし、俺の蹴りは魔法の刀身を消すことで拘束から逃れた男の子に避けられた。

が、そこで止めず、蹴り上げた足を踵落としに変化させ、肩口を狙う。

「っ!？」

咄嗟に気づかれ、飛び退かれてしまった。

長々と言っているが、氷の矢を捌いてから、まだ3秒足らず。

ここまで追い詰められたのは、この世界に来て初めてじゃないか？

「ふ……………」

「……………」

俺と男の子の距離は約5メートル。

まばたき1回しているうちに、余裕で詰められる距離だ。

．．．．それにしても、あいつの動き、おかしくないか？

どんなに身体操作を上手くやったとしても、7、8歳の未成熟な肉体じゃ、達人級の動きに着いてこれない。

にもかかわらず、あいつは俺の動きに着いてきて、手傷さえ負わせ
てきた。

いったい、どんな手を使ってるんだ．．．．？

「僕がどうしてお前の動きについていけないのか、わからないって顔
だな」

「!？」

．．．．この体になってから、感情がよく顔に出ちゃうなーとは思
っていたが、これは思ったより不味くないか？

相手に考えが読まれるとか、とんでもなく不利だぞ。

．．．今後の課題だな。

「『念力』という、コモンマジックを知ってるな。本来は窓や扉の開閉に使われる魔法だが……それを自分にかければどうなると思う?」

と、その言葉を聞いた俺と男の子の脇へ移動したアーニヤが、驚いた声で言った。

「嘘っ!? 『念力』による身体操作!? 1つ間違えば、体がバラバラになるわよ!？」

「……………」

まさか、そんなことが出来るとは…………ハッキリ言って、魔法使い……メイジを舐めてたな。

いや、あいつが凄いのか。

『念力』で自分の体を操作しながら、氷の矢や魔法の刃を使っていたのだ。

確か、イリユスに聞いた話だと、不可能ではないが、同時に2つの魔法を使うことは超高難度の技術らしいし…………

あの若さでそれを習得しているんだから驚きだ。

つか、なんでそんな『天災』が、暗殺ギルドなんかに居るんだよ?

「そして……限界を超えることも出来る！」

次の瞬間、今までに倍する速度で踏み込んできた。

その速さたるや、この俺が一瞬見失う程だ。

制空圏の感覚を頼りに、体を捌く。

猛烈な斬撃の嵐。

この速度、特A級の達人と言っても過言じゃないぞ！？

柔術着や袴が避けきれず斬り裂かれる。

避けきれない！？

致命傷をもらわないようにするだけで精一杯だ。

だが、何故か攻撃している筈の、男の子の方が、俺より苦しそうだ。

無表情を崩し、苦悶の表情を浮かべている。

そんな猛攻を5秒ほど凌いだだろうか？

男の子が急に飛び退き、片膝をついた。

「ぐっ、くく……」

ガクガクと体を痙攣させ、苦しそうだ。

演技か？

いや、あれはどう考えても違う。

っ！、と口の端から鮮血が垂れる。

何故だ？

俺は回避で手一杯で、反撃してないぞ？

あんな速さだったからな。

……速さ？

なるほど、わかったぞ。

あんな速度で動いたんだから、たとえ『念力』でサポートしていたとしても、身体中の筋肉が断裂し、内臓にダメージを受けても不思議じゃない。

あの猛攻は賭けだったって訳か。

「は、はあ……ぐっ……この……勝負……僕の……負けだな……だが」

何かを唱えてる？

．．．．．まさか！？

風が渦巻く。

氷の刃が混じった竜巻だ。

あいつ、息も絶え絶えのなかで、詠唱してたのか！

――アイス・ストーム！

そして、呪文が完成してしまった。

巨大な氷の刃を含んだ竜巻は．．．．．

「っ！？　しまっ」

俺．．．．．ではなく、少し離れた場所で見ていた、アーニヤ目掛けて放たれた。

「依頼は達成させてもらっ」

「…………え？」

アーニヤの呆然とした表情が、俺の耳に届いた。

不味い。

完全に不意を突かれた。

アーニヤは備えていなかったようだし、俺はここからじゃ間に合わない。

くそつ。

思えば、最初の投げナイフも、氷の矢も、俺とアーニヤを一直線上に居させない為の布石だったと言うわけか！？

頼みの綱のイリユスを見ると、この一瞬を狙い済ましたかのように、黒いボロを纏った暗殺者が1人だけ襲い掛かり、倒されている所だった。

いくらイリユスでも、今から動いたんじゃ、アーニヤを抱えて回避するまえに、竜巻に巻き込まれちゃうだろう。

と、そんな感じで焦っていると、氷の竜巻とアーニヤの間に、人影が……………って、イリユス！？

「私が居ることを忘れてもらっては困るな」

レイピアを正面に構えた彼から、凄まじい闘気が放たれる。

そして……

「ふうう……はああああッ！！！」

――イリユス流細剣術『奥義』スター・パス・ウォール！！！！

常軌を逸した神速の突きと、氷の竜巻が、正面からぶつかりあった。

「おおおおおおあああッ！！！！」

俺の目でも追いきれない。

恐らく、秒間50以上、もはや『突きの壁』としか思えない、イリユスの奥義と、氷の竜巻は数秒の拮抗の後、イリユスの勝利で終わった。

「……………く……………そ……」

カラン、とナイフが地面を転がり、男の子が崩れ落ちる。

念のため確認したが、完全に気を失っていた。

どうやらギリギリだったらしい。

イリユスの方に振り返ると、レイピアの刀身がコナゴナに砕け、イリユス自身も右腕を抑えている。

「ちょっ、イリユス、大丈夫なの？」

「大丈夫か、イリユス？」

「……ああ、問題ない。今の技は体へのダメージをまったく考慮しない、奥の手の1つだからな。なに、魔法で癒せば明日には治っているさ」

こうして、暗殺ギルドを俺たちは危うい場面もあったが、無事に撃退したのだった。

いろいろあったが、予定通り船は出航した。

今は予約した部屋で思い思いにくつろいでいる。

「……さっきはサンキューな、イリユス。思ったより苦戦しちまった」

「なに、気にするな。子供とはいえ、かなりの強敵だっただろ？
見ていればわかるさ」

「……にしてもスゴかったわね、あの子。魔法の二重使用に、『念力』による身体操作よ！」

「ああ。俺は魔法使いじゃないからわからないけど、そんなに凄いのか？」

「当たり前じゃん。2つの魔法を同時に使うのは超高等技術よ。
表の世界じゃ、ハルケギニア全体で10人と居ないわよ」

そ、そんなにスゴかったのか……

「それに、『念力』による身体操作とかどんだけよ」

「難しいのか？」

「べらぼうにね。　と言うか、不可能……だと思ってたわ。だって、自分の体を隅から隅まで理解して初めてスタートラインよ？　歩くだけでも、人つてのは意識しないで筋肉を動かすけど、それを意識して、しかも高速で動かすのよ？　少しでも集中力が乱れれば、筋肉なんか千切れて、バラバラになってもおかしくない。それを実戦の緊張下でやるのに、どれだけ修練を積みばいいのやら……想像もできないっての」

「うわっ、そりゃキツいな。」

それをあの子どもは、ほとんど違和感なくやってたってわけか。

「……凄まじい、としか言えないな。」

「……にしても、剣が壊れちゃったな」

話題を変えて、イリユスに話しかける。

「そうだな。……まあ仕方ないさ。　トリスティンで新しく調達するとして」

「あ、じゃあその時には、あたしがお金出すわよ」

「ん、いいのか？」

「ええ、あたしを守るために壊しちゃったんだし、それくらいわね」

「ふっ、私がエルフだと知っても態度を変えないんだな。まあ、嬉しくはあるが」

「まあね。自分の命を救ってくれたのに、怖がるとか失礼じゃない？ 噂とだいぶ違うみたいだしさ」

「ま、これから宜しく頼むぞ、イリユス、アーニヤ！！！」

何故か、イリユスとアーニヤの会話を遮るように俺は声をかけた。

「……はて、なんでこんなことしたんだ？」

「……まあいいか。」

「ああ、お前達と出会ってから、退屈と言う言葉とは無縁だ。どうせ次のトリステインでも何かがあるのだろう。せいぜい楽しむとするさ」

「ふふふ、あんた達と一緒になら、父さんの仇に会える気がするのよね。お宝の匂いもするし……おまけに、美少女に美男子よ！？ 何処までも着いていくわ♪」

……見境なしか。

前に胸を揉んできた時は、レ●かと思ったが……

こうして俺たちは、アルビオンの空へと旅立った。

さて、次の場所では何が待ち受けているのやら。

今から楽しみではない。

前の世界ではこんなことがなかった。

『拳聖』との死闘に敗北した俺は、自分がその時、空っぽだったことに気づいた。

いつの間にか、俺には、緒方一神斎との闘い以外、何もなかったんだ。

なら、見付けるしかない。

幸い、此処は剣と魔法の世界だ。

世界中を旅するのも、また一興。

平賀流が魔法相手でも通じることを証明してみるか？

はたまた、世界最強でも目指して鍛えてみるか？

いや、小さい頃、大牙じいさんとやったように、世直しの旅でもしてみるか？

ふふ、時間はあるんだ。

いざ、新天地へ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4672t/>

魔法世界冒拳記

2011年6月12日18時05分発行